

今年の4月からベルリン芸術大学大学院に留学されている桑原さん。
毎日がとても充実している様子。
日本とドイツの違い。何を得て、どのように変わったのか。変わらないのか。
どんな生活を楽しんでいるのか。興味深いお話満載です♪

Q1. 今年の4月からベルリン芸術大学大学院に留学され、ヘルヴィツヒ先生に師事されていますが、自分がどう変わったと思われるか。何を得たと思われるか。

A1. 留学を始めてまだ3ヶ月ちょっとですので、自分がどう変わっているのか確認する余裕もなく毎日を過ごしています。

振り返ってみますと、留学当初は役所や銀行の手続きから、レッスンや日常の買い物まですべて英語で行っていましたが、最近は英語を使うことは少なくなりました。

平日は毎日朝9時から12時過ぎまで、私立のドイツ語学校に通っていますので、そのお蔭もあり、次第にドイツ語の生活に馴れてまいりました。

ヘルヴィツヒ先生のレッスンも、ある日突然前ぶれもなくドイツ語に変わり、鍛えていただいています。(笑)

作曲家と同じ言語を日常的に話すことで、その発音やイントネーションやフレーズから楽曲の理解を深めることができる、ということは、高校時代からいろいろな方にアドバイスされてきましたので、さらに頑張りたいと思います。



(ベルリン芸大の練習室から見える中庭ご本人より)

ヘルヴィツヒ先生のレッスンは毎回興味深い内容ばかりです。今回のリサイタルのためにベルリンを発つ前々日に、先生のご自宅に伺ってレッスンを受けました。

実はその前日に、先生から「リサイタルで初めて弾く曲(ベートーヴェンとブラームス)をもう一度レッスンしようか？」と連絡をいただいたのです。

そして、まさにこの2曲は、演奏会後に何人かのお客様から、今までにはなかったタイプの好評をいただき、嬉しく思いました。

今後も更にヘルヴィツヒ先生のもとで真摯に学び、多くの教えを吸収しながら自分の演奏に反映させていきたいと思っています。



Q2. ベートーヴェンやブラームスが生まれ、数々の名作を残したドイツですが、文化的に、音楽的に日本との違いを感じることはありますか。

A2. まず、そもそもの街の雰囲気がとても解放的だと思います。例えば個人的な感想ですが、パリは華やかな美しさが魅力ですし、イタリアは古き良き街並みが今も多く残っていると感じます。

そんな中ベルリンはというと、ある程度近代的で、それでいて公園や広場が多く、比較的シンプルで馴染みやすく感じるのです。

しかし、そこには戦争で多くの歴史的建造物を失った背景があり、日本から来た私が一筋縄では理解できないものがあると感じています。

ドイツ人はヨーロッパの中では真面目で几帳面な国民性で、日本人と近いとよく言われますが、何かに熱中する時の熱量は物凄いなと感じます。ベルリンフィルの演奏会でも、日本人にはないようなエネルギーを感じました。

また丁度W杯の時期で、試合の日の動物園駅前(ベルリン芸大の最寄り駅で繁華街)は、それはそれは信じられないほどの大騒ぎでした。ドイツ音楽に秘められた熱量も桁外れなのだと感じています。



(ベルリンフィル フィルハーモニカ内 ご本人より)

Q3. 現時点では、どの時代、どの国の作曲家がお好きですか。

A3. 興味はドイツの作曲家、特にベートーヴェンとブラームスに向いています。

ブラームスは私にとって、最近までほとんど触れてこなかった作曲家で、まだ咀嚼しきれない部分も多く、自分に合っているのかどうかもよく分かりませんが、その分興味があります。

演奏するという意味では、ロシアものは変わらず好きです。

Q4. 今回のリサイタルを経て、何か新しい発見はありましたか。

A4. 私の組むプログラムはいつも重い選曲になりがちですが、そんな中で、今回ベートーヴェンのアンダンテ・ファボリを入れたことはとても新鮮でした。ソナタの緩徐楽章にあたるような作品は色々な意味で難しいと感じていますが、本番では難しく考えすぎず、すっきりと美しい響きを楽しみながら演奏することができました。

ヘルヴィツヒ先生にダンスの拍感やリズム、和声的な事を細かくアドバイスいただき、それを意識した練習をしてきたからこそ、ステージでは自由に弾くことが出来たのだと思います。こうした感覚は、今回新しい発見になりました。



(ブランデンブルグ門 ご本人より)

Q5. ご自分の演奏の個性は何だとお考えですか。他のピアニストと差別化するとすると、どんな点にあるとお考えですか。

A5. 個性という自分ではなかなか掴みどころがなく、今はまだ「この作曲家を究めたい」というような意識もあえて持たずに勉強しているため難しいのですが、持ち味は、スケール感ではないかと思っています。

ソナタや長大な作品をどっしりと弾くことが好きです。

Q6. 今回のプログラムにプロコフィエフのピアノ・ソナタ第8番「戦争ソナタ」を選ばれた理由は何でしょうか。プロコフィエフはこの曲で何を表現したかったのでしょうか。

A6. この曲は、昨年12月の藝大の卒業試験で初めて演奏いたしました。その時はかなり短期間で勉強したため、まだまだ表現として満足いくものではなく、近いうちにまた勉強し直して弾きたいと思っていました。

今年3月にもレコーディングでこの曲を演奏させていただきましたが、録音とライブはまた違うものがありますので、今回良い演奏機会をいただいたと思い、プログラムに組み込みました。

この曲は自演が残されていないため、プロコフィエフが何を表現したかったかを考えるのはきわめて難しいです。例えば、第二楽章では“夢見るように”という楽想表記にもかかわらず、アイロニカルで退廃的な雰囲気の色濃く滲み出ています。

プロコフィエフの“戦争ソナタ”は3曲ありますが、6番や7番とは全く異なり、この8番は内省的で幻想的な曲調から始まり、幾度となく戦慄や激昂に襲われます。

そして、最終楽章ではミタリ一調の独特なリズムに乗りながら、いつの間にかとんでもない狂気狂乱の渦に飲み込まれていきます。

イメージするものは人それぞれと思いますが、私自身は、必ずしも戦争そのものに結びつけて考えていません。社会の中と自分の中に潜在的に相容れないものがあり、相反するものの葛藤や諦観を繰り返しながら、しまいには抑えきれなくなって爆発していくエネルギーを表現しているように感じています。

Q7. 桑原さんが一番幸せだなと思う時はどんな時ですか。自分を一番元気づけてくれるモノ(人、食べ物等)は何ですか。

A7.

・一番幸せなときは、自分でも納得できる演奏をして、お客様からも大きな拍手をいただいたときです。

・自分を一番元気づけてくれる人は、やはり両親だと思います。

・美味しいもの、特にお肉を食べると元気になります。



(レストランでのドイツ料理 ご本人より)

「作曲家と同じ言語を日常的に話すことで、その発音やイントネーションやフレーズから楽曲の理解を深めることができる。」

この言葉が示すように、桑原さんはドイツ留学で本当に多くのことを身に付け、自分でも気付かないうちに音楽、演奏、音色、表現の幅を広げているのだろう。

言語はもちろん、ドイツの空気を吸い、ドイツ人の中に入り、ドイツ料理を食し、ベートーヴェンやブラームスが歩いたかもしれない場所を歩く。そして何よりヘルヴィツ先生から多くのことを吸収している。これらがすべて桑原さんの演奏に影響を及ぼしているはず。この留学でどこまで成長し、どんな変化を遂げ、どんな音楽を作るのか、次の演奏を聴くのが本当に楽しみだ♪